

「ナザレへの帰郷」

ルカの福音書 4:16~30

はじめに

昨今のコロナ禍で帰郷、帰省が難しくなった人も多いと思いますが、私もその一人です。来年こそはと考えていますが主に委ねて、今日はイエシュアが幼少期を過ごされたナザレに帰郷された時の出来事から、やはり神のご計画について見てまいりたいと思います。聖霊の助けがありますように。

1. 歓迎

ルカの福音書【新改訳 2017】

4:16 それからイエスはご自分が育ったナザレに行き、いつもしているとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた。

4:17 すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その巻物を開いて、こう書いてある箇所を目を留められた。

4:18 「主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、

4:19 主の恵みの年を告げるために。」

バプテスマのヨハネのもとで御霊の力を帯びたイエシュアは、40 日間の荒野での悪魔の誘惑、試練を乗り越え、当時、異邦人の地と呼ばれたガリラヤから、その宣教の働きを開始されました。しかしイエシュアは常に「会堂で教えた」とあり、これはユダヤ人たちが集まり、旧約聖書を読み、そして学ぶための場所であり、ご自身の故郷であるこのナザレにおいても同じくこの会堂で教えておられます。つまりイエシュアの宣教の対象はあくまでもイスラエルの民、ユダヤ人であったということです。こう言われているとおりです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

15:24 イエスは答えられた。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」

そしてナザレの会堂に集まったユダヤ人たちを前に、イエシュアはイザヤの預言書を読み上げられました。それは以下の引用でした。

イザヤ書【新改訳 2017】

61:1 【神】である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、【主】はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、

61:2 【主】の恵みの年、われらの神の復讐の日を告げ、すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。

イエシュアは御霊の力を帯びて宣教の働き「**良い知らせを伝える**」働きを始めておられました。ですからこの預言はご自分を指し示すものであり、イスラエルの神「**【主】はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた**」ということ、すなわちイエシュアはご自分がメシア（キリスト）であることを主張されたのです。

ルカの福音書【新改訳 2017】

4:20 イエスは巻物を巻き、係りの者に渡して座られた。会堂にいた皆の目はイエスに注がれていた。

「皆の目はイエスに注がれていた」とありますが、彼らのイエシュアに対するその眼差しは、疑いの目でも冷ややかな目でもありませんでした。なぜなら「注がれていた」という箇所に使われているヘブル語ナーサー(נָסַר)は本来、「受け入れる、支持する(創世記 4:7)」という意味の言葉だからです。そしてイエシュアは今読み上げたイザヤの預言がご自分を指していることを決定づける一言を放たれます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

4:21 イエスは人々に向かって話し始められた。「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」

4:22 人々はみなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いて、「この人はヨセフの子ではないか」と言った。

このように、「人々はみなイエスをほめ」たとあります。また「驚いて」ともありますが、ここに使われているターマハ(תָּמַח)も軽蔑や懐疑的な意味の言葉ではなく、理解を超えた奇蹟に対する驚きを表したものです。そしてこのターマハ「驚く」と「この人はヨセフの子ではないか」というこの言葉は、創世記のある出来事と深いつながりがあります。それはこのターマハの最初の言及でもある箇所です。

創世記【新改訳 2017】

43:33 彼らはヨセフの前で、年長者は年長の席に、年下の者は年下の席に座らされたので、一同は互いに驚き合った。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブの子であるヨセフと、その兄弟たちについてのものですが、かつて父ヤコブの寵愛を受けたこのヨセフを兄たちが妬み、彼をエジプトに売り飛ばしました。しかしヨセフはそこでエジプト最高の権力者へと上りつめ、再び兄弟たちと再会したという場面です。ここで兄弟たちは彼を見て「これが、この御方があのヨセフなのか」と「驚く」ことになるのです。ヨセフという名においてもこの出来事とナザレ人たちのイエシュアに対するそれとは結びついており、彼らナザレ人たちの驚きは恐れに近いものであったと言えます。

この時点でイエシュアのその働きの妨げとなるものは何もありません。悪魔を退け、人々の心はみなイエシュアに開かれており、すべては順調、順風満帆、絶好調というような状況でした。しかし次の言動でイエシュアは自らその状況をぶち壊しにしてしまわれます。

2. ぶち壊し

ルカの福音書【新改訳 2017】

4:23 そこでイエスは彼らに言われた。「きっとあなたがたは、『医者よ、自分を治せ』ということわざを引いて、『カペナウムで行われたと聞いていることを、あなたの郷里のここでもしてくれ』と言うでしょう。」

4:24 そしてこう言われた。「まことに、あなたがたに言います。預言者はだれも、自分の郷里では歓迎されません。」

このようにイエシュアはナザレの人々の歓迎ムードを自らぶち壊しにかかられるのです。さらにイエシュアはナザレだけでなく、なんと全イスラエル、ユダヤ人全体にまで喧嘩を売るような、いわゆる爆弾発言をされます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

4:25 まことに、あなたがたに言います。エリヤの時代に、イスラエルに多くのやもめがいました。三年六か月の間、天が閉じられ、大飢饉が全地に起こったとき、

4:26 そのやもめたちのだれのところにもエリヤは遣わされず、シドンのツアレファテにいた、一人のやもめの女にだけ遣わされました。

4:27 また、預言者エリシャのときには、イスラエルにはツアラアトに冒された人が多くいましたが、その中のだれもきよめられることはなく、シリア人ナアマンだけがきよめられました。」

これはまるでイスラエルの神はイスラエルではなくシドン人、シリア人すなわち異邦人を選ばれ、救われる、イスラエルは神に見捨てられる、呪われると言っているようなものです。これをユダヤ人の会堂で、彼らの面前で堂々と言ったのです。誰の目から見てもありえない、考えられないというような言動です。これを聞いて平静を保ってられるユダヤ人はいないでしょう。

ルカの福音書【新改訳 2017】

4:28 これを聞くと、会堂にいた人たちはみな憤りに満たされ、

4:29 立ち上がってイエスを町の外に追い出した。そして町が建っていた丘の崖の縁まで連れて行き、そこから突き落とそうとした。

ナザレの人々、いやユダヤ人たちの憤り、怒りはもっともです。彼らはイエシュアを崖から突き落とそうとします。たいていユダヤ人たちのリンチ、処刑はみんなで寄ってたかって石を投げつける石打ち刑です。しかし彼らはそうではなく崖から突き落とす方法を取りました。この方法はかつてイスラエル王アマツヤの時代、ユダ部族がセイル人という異邦人に対して行った処刑です（Ⅱ歴代誌 25:12）。つまりナザレ人たちはイエシュアを同郷どころか同族としても扱わず、異邦人として殺そうとしたということです。それほどまでにイエシュアの言動は彼らを怒らせたのです。まさに「可愛さ余って憎さ百倍」というものでした。

3. つまずきの岩

なぜイエシュアはこのようなことをなされたのでしょうか。確かにイエシュアはナザレ人たちを、神が選ばれたこのイスラエルの民を怒らせる、わざわざつまずかせるようなことをなされたのです。しかしこれもまたイザヤ書に預言されていることだったのです。

イザヤ書【新改訳 2017】

8:13 万軍の【主】、主を聖なる者とせよ。主こそ、あなたがたの恐れ。主こそ、あなたがたのおののき。

8:14 そうすれば、主が聖所となる。しかし、イスラエルの二つの家にとっては妨げの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には罨となり、落とし穴となる。

8:15 多くの者がそれにつまずき、倒れて打ち砕かれ、罨にかかって捕らえられる。

このように、イエシュアはこの預言にある「妨げの石、つまずきの岩」となられたのです。それによってイスラエルの「多くの者がそれにつまずき、倒れて打ち砕かれ、罨にかかって捕らえられ」るという、そのような状態、状況になることによってはじめて、先ほどのイザヤ書 61 章の預言「捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げる」という預言が成就するためでした。

しかし確かに預言されているからと言っても、神はなぜこのような一見回りくどいようなことをなされるのでしょうか。使徒パウロがこう説明しています。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

9:31 しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めていたのに、その律法に到達しませんでした。

9:32 なぜでしょうか。信仰によってではなく、行いによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。

9:33 「見よ、わたしはシオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。この方に信頼する者は失望させられることがない」と書いてあるとおりです。

イスラエルは確かに「義の律法」を、その体現者、完成者であるメシアを求めていました。しかし彼らは自分たちが正しく行えば、その行いの報いとしてメシアが来られる、救いを受け取ることができると考えていたのです。当時のナザレ人たちをはじめ、すべてのイスラエルの民がそのような考え方を教え込まれていました。今日でもユダヤ人たちはすべてのユダヤ人が安息日の規定を正しく行い、これを守れば、メシアが来るといようなことを言い伝えています。

ちなみにこの「つまずき」のことをヘブル語でツエラ(צִלְצַל)と言いますが、この言葉は最初の人アダムから取られた「あばら骨、肋骨」という意味のツエラー(צִלְצָל)に由来しています(創世記 2:21~22)。ここからアダムの妻エバが造られ、今日の全人類にまで至ります。つまり人はみな生まれながらにして神に対するツエラ「つまずき」をもって生まれてきている、つまずくように定められているということ(Ⅰペテロ 2:8)。しかしこの話には続きがあります。アダムからツエラー「あばら骨」が取られた際、神はその代わりにあるものをお与えになりました。

創世記【新改訳 2017】

2:21 神である【主】は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。

あばら骨、ツェーラー、すなわち「つまずき」の代わりに与えられたもの、それは「肉」です。これをヘブル語でバーサール(רֶשֶׁת)といいますが、この言葉は「福音、良い知らせを伝える」という意味のバーサール(רֶשֶׁת)という言葉の語源となるものなのです。神は人のつまずきのために、第二のアダムとも呼ばれるイエシュアにこの福音を託されるということがすでにこの時点で暗示されていたのです。

4. 福音

そしてイスラエルのつまずきとともに始まったイエシュアの福音宣教の働きは、イスラエルのつまずき、拒絶によって先ほどのツアレファテのやもめ、ナアマンに象徴された、私たち異邦人へと流れていきます。それはイエシュアがナザレの人々にそうされたような憤り、怒り、妬みを引き起こさせるためのものだとパウロは説明しています。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

11:6 恵みによるのであれば、もはや行いによるものではありません。そうでなければ、恵みが恵みでなくなりません。

11:7 では、どうなのでしょう。イスラエルは追い求めていたものを手に入れず、選ばれた者たちが手に入れました。ほかの者たちは頑なにされたのです。

11:8 「神は今日に至るまで、彼らに鈍い心と見ない目と聞かない耳を与えられた」と書いてあるとおりです。

11:11 それでは尋ねますが、彼らがつまずいたのは倒れるためでしょうか。決してそんなことはありません。かえって、彼らの背きによって、救いが異邦人に及び、イスラエルにねたみを起こさせました。

イエシュアご自身もユダヤ人たちのねたみによって十字架にかけられるのですが、そのねたみはここでパウロの言う「救いが異邦人に及び、イスラエルにねたみを起こさせ」たというものではありません。また上記を記したパウロも初めは教会を激しく迫害しましたが、それはどちらかというと異邦人に対してではなく同胞であるユダヤ人がイエシュアを信じることに対するものでした。ではどうでしょう、皆さんはこれまでの信仰生活の中で一度でもユダヤ人からのねたみを感じたことがあるのでしょうか。私は生まれる前から、母のお腹にいる時から教会に通っていて教会生活 50 年以上になりますが、一度としてそのような目にあったことはありませんし、私の知り合いからもそのような話を聞いたことさえありません。なぜならそれはここでパウロが言うような救いが、異邦人である私たちに救いがまだ及んでいないからです。ではイスラエルにねたみを起こさせるというその「救い」とは何でしょう。どのような出来事でしょう。それを表す「型」が次に記されています。

5. ただ中

ルカの福音書【新改訳 2017】

4:30 しかし、イエスは彼らのただ中を通り抜けて、去って行かれた。

イエシュアはナザレの人々の「ただ中」を通り抜けて去って行かれました。この「ただ中」のことをヘブル語でターヴェク(תָּוֶעֶק)といいます。これは本来このような意味をもった言葉です。

創世記【新改訳 2017】

1:6 神は仰せられた。「大空よ、水の真ただ中にあれ。水と水の間を分けるものとなれ。」

1:7 神は大空を造り、大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた。すると、そのようになった。

このようにターヴェクとは本来「大空」つまり空中を指す言葉なのです。イエシュアによって成される、空中における救いの御業は一つしかありません。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

これが、これこそがイスラエルにねたみを起こさせる、異邦人にまで及ぶ「救い」が成就する瞬間、イエシュアの空中再臨、携挙の出来事です。やがてイエシュアは「空中」に現れ、私たちを引き上げた後、地上に降り立つことなく「去って行かれ」ます。この時彼らはまるであの弟ヤコブに長子の祝福を奪われた兄エサウのように、妬みと憤りにかられ、激しく泣くことになるでしょう。

ちなみに今日の文中でイエシュアがイザヤ書の「巻物を開いて…」読まれそして再びそれを「巻き」という描写がありましたが、「空」という意味のラキヤ(רָקִיעַ)には「延ばして広げる」という意味もあり、また「巻く」という意味のガーラル(גָּלַל)は本来「(井戸のふたを) 転がす」という意味の言葉で、それは井戸の水を飲ませるために羊の群れが「集められる」ことを指し示す言葉なのです(創世記 29:3)。つまり巻物を巻くというイエシュアのなされた一見何の変哲もない描写の中にも「空に集められる」というこの携挙を表す「型」が表されていたのです。

最後に、少し余談になりますが、私はこの教会が建てられている「中空知」という地名が非常に気に入っています。イエシュアがやがて私を引き上げてくださる、念願の対面を果たすことができるこの「ただ中」である「空、空中」を「知」りなさい、覚えなさいと励ましてくださっているように感じるからです。その日が、その時が本当に待ち遠しいのです。その時この機能不全だらけの朽ちる身体から、イエシュアと同じ永遠の完全な身体へと変えられる、そして「いつまでも主とともにいることとなります」という、なんと素晴らしい福音、良い知らせでしょうか。「ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい」とパウロも言います。私も言います。ともにイエシュアの来られる日を待ち望みましょう。